昭和九年四月　昭和六年乃至九年事變に於ける功に依り勳一等旭日大綬章。

軍歷

明治二十八年九月　幼年學校入校。
同　三十一年五月　幼年學校卒業、由良要塞砲兵聯隊附。十二月陸軍士官學校入校。
同　三十二年十一月　士官學校卒業。
同　三十三年六月　砲兵少尉。七月要塞砲兵射擊學校附。
同　三十四年七月　要塞砲兵射擊學校教導隊附。
同　三十五年一月　由良要塞砲兵聯隊附。十一月砲兵中尉。一月砲工學校入校。
同　三十六年十二月　砲工學校高等科卒業。
同　三十七年五月　編成下令、砲兵第二聯隊副官。七月宇品出帆、大連上陸。八月旅順戰鬪參加。
同　三十八年二月　徒步砲兵第二聯隊中隊長。三月奉天戰鬪。四月砲兵大尉。五月要塞砲兵監部々員。六月宇品凱旋。
同　三十九年三月　由良要塞砲兵聯隊附。
同　四十年十月　重砲兵第三聯隊附。
同　四十二年一月　大阪砲工廠々員。七月帝國大學工學部造兵學科卒業。
大正二年一月　砲兵少佐。八月陸軍砲工學校教官。
同　三年十一月　陸軍省副官。
同　四年　大正三年八月二十三日より同四年八月二十二日迄陸軍省に在りて大正三年戰役に關する勤務。
同　五年二月　兵器本廠附。
同　六年五月　砲兵中佐。
同　八年一月　陸軍省軍務局課員。六月西伯利及び支那へ出張。
同　九年二月　陸軍省軍務局砲兵課長。八月砲兵大佐。

同　十一年二月　野戰重砲兵第四聯隊長。
同　十三年十二月　陸軍少將、陸軍科學研究所第二課長。
同　十四年五月　科學研究所第三部長。
昭和三年八月　陸軍省兵器局長。
同　五年七月　歐米各國へ出張。八月陸軍中將。
同　六年三月　歸朝。八月造兵廠長官。
同　八年　昭和七年二月二日より同八年六月三十日迄陸軍造兵廠に在りて滿洲事變勤務。
同　九年八月　陸軍技術本部長。
同　十年二月　正四位。
同　十一年八月　陸軍大將。同月豫役役。

正從三位勳一等
功一級
元帥陸軍大將　杉山元
明治十三年一月生

事變下の參謀總長

閑院總長宮殿下の御離任に依り新參謀總長として後任に親補せられた杉山大將は、福岡縣小倉市の出身にして本年六十二歳、その容貌にても知られるやう、いはゆる天才型の人ではなく、圓滿にして重厚な風格をそなへた武人である。それだけに融通無碍、その教育總監、陸軍大臣と既に陸軍の三長官の二つを經歷し、いままた參謀總長の重任を負ふたことを以ても大將の偉大な常識家たることを知ることが出來る。而も大將はまた今事變の立

役者であることも忘れてはならない。その陸相在任中に今事變が勃發、以來一年有半事變下の政軍を統率し、次いでその椅子を板垣中將に讓り現地の第一線に赴き、北支最高指揮官として明朗北支の建設に盡された。いまや事變の性格が單に支那事變の局部的たるにとゞまらず、世界的規模に於て把握されねばならない時、大將の使命は誠に大なりといふべきである。

軍歷

明治三十四年六月　歩兵少尉、歩兵十四聯隊附。
同　三十六年十一月　歩兵中尉。
同　三十七年二月　動員下令、韓國仁川上陸。五月九連城、新開岺。六月賽馬集。七月城廠、細河沿、西遍岺。八月楡樹林、同月歩兵第十四聯隊大隊副官、同月八盤岺、七盤岺、三家子、大安、平黑峪。九月遼陽。
同　三十八年二月　奉天會戰。四月歩兵第十四聯隊中隊長。五月大連出帆。六月門司上陸、歩兵大尉。
同　三十九年四月　三十七、八年戰役の功に依り功五級金鵄勳章及勳六等旭日章下賜
同　四十年十二月　陸軍大學校入學。
同　四十一年　歩兵第二十四聯隊中隊長。十二月明治三十年同四十一年韓國暴徒鎭壓事件の功に依り勳五等瑞寶章を賜ふ。
同　四十三年十一月　陸軍大學校卒業。十二月參謀本部員。
同　四十五年二月　比律賓へ出張。
大正元年十月　新嘉波へ出張。
同　二年八月　歩兵少佐。
同　三年八月　歩兵第十四聯隊大隊長。

同　四年二月　印度駐劄武官、大正四年二月十五日より同年八月二十二日迄參謀本部にありて大正三年戰役勤務。十二月勳四等瑞寶章を賜ふ。

同　六年八月　歩兵中佐。

同　七年十二月　航空第二大隊長。

同　九年六月　國際聯盟軍事常設委員。七月參謀本部々員。九月瑞西國「ジュネーブ」に於て開催の國際聯盟總會第一回會議に於ける帝國代表者隨員被仰付。十一月大正四年乃至九年戰役の功に依り勳三等旭日中綬章を賜ふ。

同　十年六月　歩兵大佐。

同　十一年四月　陸軍省軍務局航空課長。

同　十二年八月　軍務局軍事課長。

同　十四年五月　陸軍少將、陸軍航空本部補給部長。

同　十五年十一月　巴里へ出張を命ず。十二月航空本部附。

昭和二年二月　國際聯盟陸海空軍問題常設諮問委員會に於ける帝國陸軍代表者、平和條約實施委員。

同　三年四月　陸軍兵器廠附。八月陸軍省軍務局長兼軍事參議院幹事長、同月支那へ出張命ぜらる。

同　五年六月　陸軍次官心得。八月陸軍次官、陸軍中將、勳二等瑞寶章。

同　七年二月　第十二師團長。

同　八年三月　陸軍航空本部長。昭和六年九月十九日より同七年七月十五日、昭和八年三月十八日より同年六月三十日迄陸軍省及び第十二師團司令部並に航空本部にありて滿洲事變勤務。

同　九年四月　滿洲國へ出張を命ぜらる。同月昭和六年乃至九年事變の功に依り勳一等旭日大綬章を賜ふ。八月參謀次長兼陸軍大學校長。十月

滿洲國へ出張を命ぜらる。

同　十年三月　免兼職。

同　十一年一月　滿洲國及び中華民國へ出張。三月參謀本部附。五月滿洲國及び中華民國へ出張を命ぜらる。八月教育總監兼軍事參議官。九月從二位。十一月陸軍大將。

同　十二年二月　陸軍大臣兼對滿事務局總裁。

同　十三年六月　依願免本官兼官。十二月北支派遣軍最高指揮官。

同　十四年九月　軍事參議官。

同　十五年十月　參謀總長。

正三位勳一等
功二級

明治十三年四月生

山形縣士族小磯進の長男として生る。

賞典

明治二十九年四月　三十七、八年戰役の功に依り功四級金鵄勳章並に勳五等旭日章。

大正九年十一月　大正四年乃至九年戰役の功により功三級金鵄勳章及び勳三等旭日章下賜。

昭和五年十一月　勳二等瑞寶章。

同　九年四月　昭和六年乃至九年事變の功に依り功二級金鵄勳章及勳一等旭日章

軍歷

明治三十一年十二月　士官候補生として歩兵第三十聯隊入隊。
同　三十二年十二月　陸軍士官學校入校。
同　三十四年六月　歩兵少尉、歩兵第三十聯隊附。
同　三十六年十一月　歩兵中尉。
同　三十七年二月　動員下令。三月宇品出帆。五月大連城、七月摩天嶺、八月遼陽、十月沙河の各戰鬪參加。
同　三十八年一月　黑溝臺、三月奉天戰鬪。六月歩兵大尉。十二月宇品に凱旋。
同　三十九年二月　歩兵第三十聯隊中隊長。
同　四十年十二月　陸軍大學校入校。
同　四十三年十一月　陸軍大學校卒業。十二月士官學校教官。
大正元年九月　關東都督府陸軍參謀。

同　三年八月　歩兵少佐、歩兵第二聯隊大隊長、大正三年戰役に關する勤務。
同　四年八月　東部內蒙古へ出張。
同　五年三月　支那へ出張。
同　六年一月　陸軍大學校兵學教官。
同　七年七月　歩兵中佐、同月三十日シベリヤへ差遣。八月動員下令、第二師團參謀、同三日敦賀出發ウラジオ上陸。
同　八年二月　「ユフタ」附近戰鬪。三月「ポチカレオ」附近戰鬪。四月宇品歸着
同　十年六月　シベリヤ及び支那へ出張。
同　十一年二月　歩兵大佐、六月歐洲へ出張。
同　十二年三月　歐洲より歸朝、陸軍大學校教官。
同　十五年十二月　陸軍少將。
昭和二年七月　陸軍航空本部總務部長。

同　四年八月　陸軍省整備局長。
同　六年一月　從四位。八月陸軍中將。
同　七年二月　陸軍次官。八月關東軍參謀長。
同　九年三月　第五師團長。正四位。
同　十年十二月　朝鮮軍司令官。
同　十二年四月　從三位。十一月陸軍大將。
同　十三年七月　豫備役。八月特旨を以て正三位に敍さる。
同　十四年四月　拓務大臣（平沼內閣）
同　十五年一月　拓務大臣（米內內閣）

元帥
從三位勳一等
功五級
正
陸軍大將　畑俊六

明治十二年七月生

支那派遣軍總司令官

支那派遣軍總司令官西尾壽造大將の軍事參議官として內地に歸還するに當り、その後任として軍事參議官畑大將が親補されるに至つた。その昔日露役に於て大山總司令官あり前任者には西尾大將あり。大將は實に帝國三代目の總司令官である。大將は會津の生んだ將軍で、かの陸軍の偉材とうたはれた、故英太郎大將の實弟である。本年六十三歲、同期には杉山、小磯の二大將がある。陸大も優等で卒業した明晰な頭腦の所有者である。而も戰

運にめぐまれ、先きに中支最高指揮官として徐州殲滅戰、武漢攻略戰と二大作戰を遂行、赫々たる武勳をたてゝ歸還されてゐる。いままた武人としての最高榮譽たる總司令官の重任を擔うに至る。

軍歷

明治二十九年九月　中央幼年學校生徒となる。
同　三十二年五月　幼年學校卒業、優等に付双眼鏡一個下賜。十二月士官學校入校。
同　三十三年十一月　士官學校卒業。
同　三十四年六月　砲兵少尉、野戰砲兵第一聯隊附。
同　三十七年三月　動下令、四月宇品出帆。五月孫家咀子上陸、旅順戰に從ふ。八月負傷。九月東京豫備病院に入る。
同　三十八年四月　野戰砲兵第一聯隊補充大隊中隊長となる。六月砲兵大尉。
同　三十九年四月　日露戰役の功に依り功五級金鵄勳章並に勳六等旭日章を賜ふ。
同　四十年十二月　陸軍大學校に入る。
同　四十三年十一月　陸軍大學校卒業、優等につき軍刀一振下賜さる。
同　四十四年九月　清國へ出張。
同　四十五年三月　軍事研究として獨逸國駐在。
大正三年七月　砲兵少佐。
同　五年三月　歐洲より歸期。五月參謀本部附。
同　七年十二月　歐洲へ出張。
同　八年二月　講和會議全權委員隨員となる。
同　九年五月　支那へ出張。
同　十年五月　サガレン州へ出張。七月砲兵大佐、野砲兵第十六聯隊長。
同　十二年十二月　支那へ出張。

同　十五年三月　陸軍少將、野戰重砲兵第四旅團長。
昭和三年八月　參謀本部第一部長。
同　六年八月　陸軍中將、砲兵監。
同　八年八月　第十四師團長。
同　九年四月　昭和六年乃至九年事變の功により勳一等旭日大綬章。
同　十年十二月　陸軍航空本部長。
同　十一年八月　臺灣軍司令官。
同　十二年十一月　陸軍大將、軍事參議官。
同　十三年　中支派遣軍最高指揮官。
同　十四年五月　侍從武官長。八月陸軍大臣兼對滿事務局總裁。
同　十五年五月　軍事參議官。
同　十六年三月　支那派遣軍總司令官。

十九・六月　天皇の御信任厚し

正三位勳一等
功四級

陸軍大將　中村孝太郎

明治十四年八月生

石川縣士族中村芳房の長男として金澤市長町三番丁に生る。

賞典

明治三十九年四月　三十七、八年戰役の功により功五級金鵄勳章並に勳六等旭日章。
大正四年十一月　大正三、四年戰役の功に依り功四級金鵄勳章及勳四等旭日小綬章
同　九年十一月　大正四年乃至九年戰役の功により勳三等旭日中綬章。
昭和九年四月　昭和六年乃至九年事變の功に依り勳一等旭日大綬章。

軍歷

明治三十年九月　中央幼年學校入校。
同　三十三年五月　幼年學校卒業、士官候補生として歩兵第三十六聯隊入隊。十二月陸軍士官學校入校。
同　三十四年十一月　士官學校卒業。
同　三十五年六月　歩兵少尉、歩兵第三十六聯隊附。
同　三十七年五月　動員下令、歩兵第三十六聯隊旗手。七月宇品出帆、清國柳樹屯上陸、安子岺、千大山戰鬪、八月歩兵中尉、旅順要塞第一回攻擊。九月龍眼北方保壘攻擊。十月歩兵第三十六聯隊大隊副官、二龍山攻擊、松樹溝谷地鉄橋附近、旅順第二回各戰鬪。十二月歩兵第十八旅團副官、二龍山砲臺攻擊、爾後烏帽子山、盤龍山各戰鬪參加奉天戰鬪參加。十一月中央幼年學校生徒隊中隊長、同二十四日大連出帆凱旋。
同　三十八年二月　陸軍大學校入校。
同　三十九年十一月　歩兵大尉。五月歩兵第三十六聯隊中隊長。
同　四十一年一月　陸軍大學校卒業、參謀本部附。
同　四十二年十二月　參謀本部々員。
同　四十三年三月　編成下令、第一師團第五兵站司令部參謀、同二十八日宇品出帆、
大正三年八月　龍口上陸、更に勞山灣上陸。十月沙子口に廻航上陸、王歌庄、即墨、浮山後を經て青島着。十二月青島出發、横濱歸着。
同　四年　一月二日より同年八月二十二日迄參謀本部に在りて大正三年戰役に關する勤務に從事。
同　五年八月　歩兵第三十五聯隊大隊長。
同　六年五月　參謀本部々員。
同　八年七月　歩兵中佐。八月歐洲へ出張。大正七年八月二日より同八年十月二

十二日迄參謀本部に在りて戰役に關する勤務。

同　九年九月　瑞典公使館附武官兼丁抹公使館附武官。

同　十年四月　參謀本部々員。

同　十一年八月　歩兵大佐、歩兵第六十七聯隊長。

同　十二年八月　陸軍省副官。

昭和二年七月　陸軍少將、歩兵第三十九旅團長。九月正五位。

同　三年五月　臨時江岸派遣旅團長として平安北道閭延面に在りて國境警備並に匪賊討伐に從事。

同　四年八月　朝鮮軍參謀長。

同　五年十二月　陸軍省人事局長。

同　七年四月　陸軍中將。二月支那駐屯軍司令官。五月從四位。

同　九年三月　第八師團長。六月正四位。

同　十年十二月　教育總監部本部長。

同　十二年二月　陸軍大臣兼對滿事務局總裁。同十九日依願免本官並に兼官、軍事參議官親補、東京警備司令官兼東部防衛司令官。

同　十三年六月　陸軍大將、朝鮮軍司令官。

同　十五年三月　正三位。

同　十六年七月　軍事參議官。

從三位勳一等
功五級

陸軍大將西尾壽造

明治十四年十月生

支那派遣軍總司令官

支那派遣軍總司令官として、今をときめく西尾大將は、鳥取縣出身、本年六十一歳、沈默將軍の異名がある。總司令官はけだし適任といふべきである。而してこの人事を行つた當時の畑陸相とは同期の第十四期の士官學校卒業で、畑大將の首席についで西尾大將は次席であつた。以て大將の偉材たることを知る。その昔日露役に際し、永沼挺身隊に參加、ミスチエンコ將軍の率ゐるコサック騎兵の集團を追擊して赫々たる武勳をあげ、功五級を

賜つたことは大將の若き日の勇猛を物語るものである。

軍歷

明治三十三年十二月　士官候補生として歩兵第四十聯隊入隊。
同　三十四年十二月　陸軍士官學校入校。
同　三十五年十二月　見習士官。
同　三十六年六月　歩兵少尉、歩兵第四十聯隊附。
同　三十七年四月　動員下令。五月宇品出帆、これより各地に轉戰す。
同　三十八年二月　歩兵中尉、奉天大會戰。三月五日負傷入院、同月十九日全治退院
八月歩兵第四十聯隊副官。
同　三十九年二月　凱旋。四月戰功により功五級金鵄勳章並に勳六等旭日章下賜。
同　四十年十二月　陸軍大學校入校、歩兵第四十聯隊附。

同　四十二年十二月　歩兵大尉、歩兵第四十聯隊中隊長。
同　四十三年十一月　陸軍大學校卒業（優等に付軍刀一振下賜）陸軍省軍務局課員。
大正元年八月　軍事研究として獨逸國駐在。
同　三年十一月　歸朝、參謀本部に在りて大正三年戰役關する勤務に從事す。
同　四年二月　參謀本部々員。三月陸軍々醫學校教官。十一月大正三、四年戰役の功により勳四等瑞寶章。
同　五年一月　陸軍大學校兵學教官。十一月歩兵少佐。
同　八年四月　陸軍省副官兼陸軍大臣祕書官。
同　九年五月　支那へ出張を命ぜらる。八月歩兵中佐。十一月大正四年乃至九年戰役の功に依り旭日小綬章。
同　十一年四月　歩兵第十聯隊附。
同　十二年四月　陸軍大學校兵學教官。八月歩兵大佐。
同　十四年三月　歩兵第四十聯隊長。
同　十五年三月　教育總監部第一課長。
昭和三年十二月　兼補陸軍通信學校研究部員。
同　四年八月　歩兵第三十九旅團長。陸軍少將。
同　五年八月　陸軍兵器本廠附。
同　七年四月　參謀本部第四部長。十二月滿洲國へ出張。
同　八年六月　二十七日より同二十九日迄奉天省清原縣にありて滿洲事變勤務に從事。八月陸軍中將。
同　九年四月　昭和六年乃至九年事變に於ける功に依り勳一等旭日大綬章。
同　十一年三月　參謀次長。十二月參謀本部總務部長事務取扱。
同　十三年　教育總監。
同　十四年八月　陸軍大將、從三位。九月支那派遣軍總司令官。

同　十六年三月　軍事參議官。

大將は上記追加の如く昭和十六年三月一日附を以てその職を畑大將に讓つて軍事參議官に補さる。その故國を離れること滿一年六ケ月、支那派遣軍全將兵の父として多大な功績を殘された。また中國新中央政府の成立に當つて大將の果された役割は大きなものであつた。陸軍では大將の歸還に當つてその赫々たる武勳を讃へ、事變以來最初の正式凱旋として、嚴肅なる儀禮を以て遇すると發表された。

陸軍大將　古莊幹郎

明治十五年九月生
昭和十五年七月歿
享年五十九歳

正三位勳一等
功五級

熊本縣の出身にして、古莊幹之の長男として生る。前記畑、西尾の二將軍と同じ陸士第十四期生で、兩者をしのぐ逸材として、前途を囑望された。途中病魔の犯すところとなり、その生命を危ぶまれたが、幸い全快、參謀本部第一部長として再び登場され、爾後師團長、陸軍次官、航空本部長と樞要ポストを經て、今事變には南支派遣軍最高指揮官として廣東攻略に赫々たる武勳を樹つ。不幸病を得て薨去さる。

賞典

明治三十四年五月　中央幼年學校卒業の際優等につき銀時計下賜。

同　三十五年十一月　陸軍士官學校卒業の際優等に付銀時計下賜。
同　三十九年四月　三十七、八年戰役の功に依り功五級金鵄勳章並に勳六等旭日章。
同　四十二年十二月　陸軍大學校卒業の際優等に付軍刀一振下賜。
昭和九年四月　昭和六年乃至九年事變の功に依り勳一等旭日大綬章。

軍歷

明治三十一年九月　中央幼年學校入校。
同　三十四年五月　中央幼年學校卒業。十二月陸軍士官學校入校。
同　三十五年十一月　陸軍士官學校卒業。
同　三十六年六月　歩兵少尉、近衞歩兵第四聯隊附。
同　三十七年二月　動員下令。三月宇品出帆。四月九焦島、五月鴨綠江の戰鬪。七月清國奉天府ヤモリレザ附近にて負傷入院。八月聯隊旗手、同月大相屯、涂家溝。十月八家子及び其後各地に轉戰。
同　三十八年二月　歩兵中尉。三月達子堡、唐家屯戰鬪に參加負傷。十一月宇品歸着。
同　三十九年十一月　陸軍大學校入校。
同　四十一年十二月　歩兵大尉。
同　四十二年十二月　陸軍大學校卒業。
同　四十四年三月　軍事研究として獨逸國駐在。四月東京出發。
大正三年八月　歐洲へ出張被仰付。
同　五年一月　陸軍大學校兵學教官。三月歐洲より歸朝。五月歩兵少佐。大正三年八月二十三日より同五年一月十九日迄歐洲戰役に關する勤務。
同　七年四月　山縣有朋大將副官。十二月シベリヤ及び支那へ出張。
同　八年二月　支那より歸朝。
同　九年八月　歩兵中佐。
同　十年二月　陸軍大學校教官。七月サガレン州へ出張。

同　十二年八月　歩兵大佐。
同　十三年二月　歐洲、米國等へ出張。三月東京出發。
同　十四年五月　近衛歩兵第二聯隊長。
昭和二年七月　陸軍省軍務局軍事課長。
同　三年二月　支那へ出張。八月陸軍少將。歩兵第二旅團長。
同　七年二月　參謀本部第一部長。十二月滿洲國へ出張。
同　八年三月　陸軍中將。
同　九年八月　第十一師團長。
同　十年九月　陸軍次官。
同　十一年三月　陸軍航空本部附。八月陸軍航空本部長。
同　十三年　南支派遣軍最高指揮官。
同　十四年五月　陸軍大將、軍事參議官。

從三位勳一等
功五級

陸軍大將山田乙三

明治十四年十一月生

戰時下の教育總監

大將は故永田鐵山中將、鹽澤幸一海軍大將等と同じく長野縣の出身である。本年六十一歳、寡默な眞に武人らしい武人として知られてゐる。而も日露役には「鬼少尉」の勇名を驅せ、功五級下賜の武勳を持つてゐる。今事變には中支派遣軍最高指揮官として、在任十ケ月、南昌作戰、廬山掃蕩戰、次いで湖南作戰と輝しき勳功を樹てられた。歸還するや、教育總監として、戰時下皇軍錬成の總元締に任じた。かつて士官學校長として全校生徒の

信望を一身に集めたことと思ひ合せて、けだし適任といふべきであつた。昭和十五年十月大將に榮進す。十六年九月十二日防衛司令部の設置に伴ひ、初代總司令官に補さる。邦家の前途いまや多難なる時、大將の偉大なる經歷は吾人をして滿腔の信頼を捧げしめるものである。同期には畑、西尾、故古莊の三大將がある。

軍歷

明治三十一年　九月　中央幼年學校入校。
同　三十四年　五月　幼年學校卒業。十二月陸軍士官學校入校。
同　三十五年十一月　士官學校卒業。
同　三十六年　六月　騎兵少尉、同月騎兵第三聯隊附。十一月戸山學校體操科入學。
同　三十七年　三月　動員下令、騎兵第三聯隊編入。四月宇品出帆。五月清國猴兎石上陸、これより南山、得利寺、蓋平、大石橋、首山堡、遼陽等に轉戰す。九月病に依り入院。十一月內地歸還。
同　三十八年　二月　騎兵中尉、士官學校馬術教官。
同　三十九年　四月　三十七、八月戰役の功に依り功五級金鵄旭章並に勳六等旭日章。十月士官學校生徒隊附。
同　四十二年十二月　陸軍大學校入校。
大　正元年　陸軍大學校卒業。
同　三年十一月　陸軍騎兵實施學校教官。八月二十三日より同四年八月二十二日迄參謀本部に在りて大正三年戰役に關する勤務。
同　四年十一月　大正三、四年戰役の功に依り勳四等旭日小綬章。
同　五年一月　滿洲國へ出張。
同　七年一月　陸軍大學校兵學教官。六月騎兵少佐、騎兵學校教官。
同　十一年八月　騎兵中佐、騎兵監部々員。

同　十二年十二月　佛領印度支那へ出張。
同　十三年二月　騎兵第二十六聯隊長。
同　十四年八月　騎兵大佐。
同　十五年三月　朝鮮軍參謀。
昭和二年七月　參謀本部課長。
同　三年一月　兼補陸軍大學校兵學教官。昭和三年四月十九日より同七月十日迄參謀本部にありて昭和三年支那事件に關する勤務に從事。
同　五年八月　陸軍少將、陸軍騎兵學校教育部長。
同　六年八月　騎兵第四旅團長。
同　七年八月　陸軍通信學校長。
同　八年八月　參謀本部第三部長。
同　九年四月　昭和六年乃至九年事變に於ける功に依り旭日中綬章。五月滿洲國へ出張。八月參謀本部總務部長、陸軍中將。
同　十年八月　參謀本部第三部長。十二月陸軍士官學校長。
同　十二年四月　正四位。
同　十四年一月　中支派遣軍最高指揮官。二月勳一等瑞寶章。十月教育總監兼軍事參議官。
同　十五年四月　從三位、八月陸軍大將。
同　十六年九月　防衛總司令官。

從三位勳一等
功五級

陸軍大將　梅津美治郎

明治十五年一月生

稀れに見る秀才

植田大將の後を受けて五代目の關東軍司令官兼駐滿特命全權大使の重責を繼いだ梅津大將は、南次郎大將、故金谷範三大將と同鄉の大分縣出身である。本年六十歲。士官學校は第十五期で幼年學校より陸大まで首席で通したといふ稀れに見る秀才であつた。かの二、二六事件直後、寺內陸相の下に次官に就任して以來、中村、杉山の兩陸相と續いてその女房役となり、昭和十三年六月まで滿二年と四ヶ月渾身の努力を拂つたことは未だ世人の記憶に新たである。大將の名が國民の間に知られるに至つたのは支那駐屯軍司令官以來のことで第一次北支事變の時、梅津、何應欽協定を結んで無血の處理をしたことはあまりにも有名である。尙大將の同期生には侍從武官長蓮沼蕃、軍事參議官多田駿、西部軍司令官上村淸太郎等の將軍がある。

軍歷

明治三十年九月　熊本幼年學校生徒となる。
同　三十三年七月　幼年學校卒業。九月中央幼年學校入校。
同　三十五年五月　中央幼年學校卒業。
同　三十七年三月　動員下令、同月步兵少尉、步兵第一聯隊附。四月宇品出帆、爾後十三里臺、南山、双臺溝、寺兒溝等に轉戰す。十月步兵第一聯隊大隊副官となる。

同　三十八年　一月　旅順開城。二月奉天戰に參加。六月步兵中尉。
同　三十九年　一月　宇品凱旋。四月三十七、八年戰役の功に依り功五級金鵄勳章及び勳六等旭日章を賜ふ。
同　四十年十二月　步兵第一旅團副官。
同　四十一年十二月　陸軍大學校入校。
同　四十四年十一月　陸軍大學校卒業。
同　四十五年　三月　步兵大尉、步兵第一聯隊長。
大正二年四月　獨逸國駐在被仰付。
同　三年八月　參謀本部附。十一月歸國。
同　四年三月　丁抹國駐在被仰付。十一月大正三、四年戰役の功に依り勳四等旭日小綬章を賜ふ。大正四年八月より六年五月迄丁抹國に在りて歐洲戰役に關する勤務に服す。
同　七年六月　步兵少佐。七月奥保鞏元帥の副官となる。
同　八年二月　歐洲へ出張を命ぜらる。十一月瑞西國公使館附武官。
同　十一年二月　步兵中佐。
同　十二年三月　陸軍大學校兵學教官。
同　十三年十二月　步兵大佐。步兵第三聯隊長。
同　十五年十二月　參謀本部課長。
昭和三年　四月より同年七月迄參謀本部に在りて昭和三年支那事件に關する勤務に從事す。
同　四年五月　滿洲へ出張。
同　五年八月　陸軍少將。
同　六年八月　參謀本部總務部長。
同　八年一月　中華民國及び滿洲國へ出張。十一月歸朝。

同　九年三月　支那駐屯軍司令官。八月陸軍中將。
同　十年八月　第二師團長。
同　十一年三月　陸軍次官。
同　十四年七月　勳一等旭日大綬章を賜ふ。九月關東軍司令官兼特命全權大使として滿洲國駐劄被仰付。
同　十五年八月　陸軍大將。同月從三位。

從三位勳一等
功五級
二

陸軍大將 梅津美治郎

明治十六年三月生

大將は林銑十郎、阿部信行の兩大將と共に加賀百萬石金澤の生んだ陸軍の逸材である。本年五十九歳、寡默謹嚴な將軍として知られ、かの歐洲大戰最中イギリスに駐在し部內に於けるヨーロッパ通としても有名である。今事變には、現地部隊長として赫々たる武勳を樹て、昨々年八月畑大將の陸相就任により、その後を襲つて侍從武官長の重任を拜して歸還、今日に至つてゐる。以下は大將の軍歷である。

明治三十七年　三月　騎兵少尉。騎兵第十聯隊附。四月動員下令、騎兵第十聯隊第二中隊附。五月宇品出帆。六月淸國南尖澳上陸、之より岫巖、分水

岑、析木城、遼陽、沙河等に轉戰す。

同　三十八年　二月　奉天大會戰に參加。六月騎兵中尉。

同　三十九年　一月　凱旋。四月戰功に依り功五級金鵄勳章並に勳六等旭日章を賜ふ。

同　四十一年十二月　陸軍大學校入校。

同　四十四年十一月　陸軍大學校卒業。

大正元年十月　參謀本部附。

同　二年四月　騎兵大尉、騎兵第十聯隊中隊長。

同　七年七月　騎兵少佐。參謀本部員。八月編成下令、浦塩派遣軍參謀。十二月陸軍大學校教官。

同　九年十一月　大正四年乃至九年戰役の功に依り旭日小綬章を賜ふ。

同　十二年二月　騎兵中佐。十月參謀本部々員。

同　十三年二月　騎兵第九聯隊長。

同　十四年八月　騎兵大佐。十二月東宮武官兼侍從武官。

同　十五年十二月　侍從武官。

昭和六年八月　陸軍騎兵學校教育部長、陸軍少將。

同　八年三月　騎兵第二旅團長。

同　十年八月　陸軍中將、騎兵監。

同　十一年七月　昭和六年乃至九年事變の功に依り勳二等旭日中綬章を賜ふ。十二月第九師團長。

同　十四年一月　勳一等瑞寶章を賜ふ。八月侍從武官長。

同　十五年十月　從三位。十二月陸軍大將。

陸軍大將岡村寧次

從三位勳一等
~~正三位~~
功一級

明治十七年五月生

大將は東京市出身にして當年五十八歳、陸士十六期の首席で陸大も優等で出たといふ、所謂軍刀組の逸材である。多く軍令方面の要職にあり、昭和十一年三月中將に進む。謹嚴な武人として知らる。今事變には昭和十二年四月北滿討伐から中支第一線の部隊長に轉じ滿三ケ年現地にあり武漢攻略戰、南昌作戰等に覆面の將軍として武勳を樹てられ、昭和十五年三月內地に歸還、以來軍事參議官の要職にあつた。同十六年七月七日北支派遣軍最高指揮官に補せらる。略歷左の如し。

明治三十七年十一月　歩兵少尉。

同　三十八年四月　歩兵第一聯隊補充隊附。
大　正二年十一月　陸軍大學校卒業。
同　四年二月　參謀本部々員。
昭　和二年七月　歩兵大佐、第六聯隊長。
同　三年八月　參謀本部課長。
同　四年八月　陸軍省補任課長。
同　七年二月　上海派遣軍參謀副長。四月陸軍少將。八月關東軍參謀副長。
同　八年二月　駐滿帝國大使館附武官兼任。三月參謀本部々長。
同　十一年三月　陸軍中將。
同　十三年六月　現地部隊長。
同　十五年三月　軍事參議官。
同　十六年四月　陸軍大將。

陸軍大將 土肥原賢二

從三位勳一等
功四級

明治十六年八月生

大將は岡山縣出身にして當年五十九歳、その任官時代より支那に關係を持ち、以來二十年支那を舞臺に活躍をされて來た。部內隨一の支那通である。滿洲事變當時特務機關長として滿洲建國に盡されたことは有名である。今事變では北支戰線で兵團長として活躍し、しば〳〵偉功を樹てられ、またその徐州作戰における功績は大きなものであつた。歸還されるや軍事參議官として士官學校長をも兼任され、昭和十六年六月陸軍航空總監兼軍事參議官に親補され今日に至つてゐる。

略歷左の如し

明治三十七年十一月　歩兵少尉。
大正元年十一月　陸軍大學校卒業。
同七年六月　參謀本部々員。
昭和二年七月　歩兵大佐、第一師團司令部附。
同四年三月　歩兵第三十聯隊長。
同七年四月　陸軍少將。歩兵第九旅團長。
同十一年三月　陸軍中將。第十二師團司令部附。
同十四年五月　第一線部隊長。
同十五年九月　軍事參議官。十月兼補陸軍士官學校長。
同十六年四月　陸軍大將。六月陸軍航空總監兼軍事參議官。

多田駿

從三位勳一等

陸軍大將多田駿

明治十五年生

禪僧的將軍

陸軍は昭和十六年七月七日附を以て多田、板垣の二中將を大將に親任すると共に前者を軍事參議官に後者を朝鮮軍司令官に補す旨を發表した。十五期生では先きに關東軍司令官梅津美治郎、侍從武官長蓮沼の二大將あり、いま多田大將を加へて三名、十六期生では今期異動で北支派遣軍最高指揮官に親補された岡村寧次、現航空總監土肥原賢二、これに板垣大將を加へて同じく三名、これで事變下陸軍の第一線最高首腦部は一段と不動の堅きを加へるに至つた。

大將は仙臺は青葉城下の出身にして本年六十歳、長身痩軀、謹嚴にして而も一脈の滋味をたゝへ、宛然禪僧の趣きがある。それか知らず、かの越後の名僧良寛和尙に私淑すといふ。以て大將が單なる武辨にあらざることを示すものである。古來より我が國の名將が多く入道して佛門に歸依したことと思ひ合せ大將もまたさうした日本的な澁さをもつ將軍であることを思はせるものがある。

明治三十五年仙臺幼年學校を經て陸軍士官學校に入學、三十六年卒業。三十七年日露役の勃發と同時に砲兵少尉として出征。爾來大正二年陸大を出て、三年野砲兵第十八聯隊附となつたが、四年滿洲へ派遣され、同九年まで六ケ年の支那生活を送つた。後日支那通として事變下日本の重責を荷負ふに至つた基礎は實にこの時に築かれたのであつた。歸朝後陸軍大學校兵學教官となつたが、幾何もなく再び滿洲へ、十五年歸朝參謀本部員、續いてまた支那へ出張、かくして少壯時代の大半を支那で送つた。

昭和三年野砲兵第四聯隊長、次いで第十六師團參謀長、七年には關東軍司令部附少將、九年には野砲兵第四旅團長、十年八月梅津中將の第二師團長轉補の後々襲つて支那駐屯軍司令官となる。十一年四月中將に進級し間もなく善通寺師團長に榮轉す。

十二年七月七日支那事變勃發、我が不擴大方針は遂に支那側の入るゝところとならず、本格的な戰塵を卷起こすに至つた。同年八月大將は今井清中將の後を承けて事變下の參謀次長として統帥陣の首腦に座し、當時部内にあつて活躍してゐた石原莞爾少將を女房役として一年有半、徐州大會戰に、上海、南京の攻略戰に、次いで廣東、武漢三鎭の作戰に偉大なる統帥的手腕を發揮した。十三年次長を澤田中將に渡し現地部隊長として北滿の〇〇部隊に轉ず。十四年九月杉山元大將の軍事參議官として内地に歸還するや、後任として北支方面最高指揮官となり、今日まで滿二ケ年赫々たる武勳をあげ、今回大將に親任されると共に軍事參議官として凱旋されることゝなつた。事變はいまや複雜多岐、而もその間にあつて國是は不動、大將の軍事參議官就任は蓋し待つあるを恃むの備へといふべきである。

從三位勳一等
功三級

陸軍大將板垣征四郎

明治十八年生

偉大なる軍政家

陸軍切つての軍政家として大將の名はあまりにも有名である。また今事變とは切つても切れない存在として、事あるごとに大きく國民の面前にクロヅアップされて來た。明治十八年生れの今年五十七歳の働き盛り、先きに齋藤實、栃内曾次郎、山屋他人、米内光政、及川古志郎の海軍五大將を生み、一躍軍國の名を產んだ岩手の出である。祖父は桑陰といつて漢學者であつた。その嚴格な薫陶のもとに大將は幼年時代を送つた。溫顏謹直な多田將

軍に對して大將は精力的な剛健さをそなへた斗酒なほ辭さぬといつた豪放な將軍である。所謂秀才型でなかつたため、中央部の經驗といふものがなく、陸相の印綬を帶びるまで殆んど滿洲と支那でくらした。これこそ寧ろ大將をして後日の大をなさしめる素因であつたかも知れない。

多田大將と同じく仙臺幼年學校を經て明治三十七年少尉任官。三十八年奉天大會戰に參加。大正五年陸軍大學校を卒業、爾來支那各地に駐在、十三年支那在勤武官輔佐官となる。昭和三年聯隊長として歸還したが、間もなく關東軍參謀長となる。かの滿洲事變には最高參謀として參謀に石原莞爾を擁し名コンビを以て果斷よくこれを遂行し、一躍板垣將軍の名を天下に知らしめた。次いで奉天特務機關長として、その軍政家的手腕を百%に發揮し、いよ〳〵部內に重きをなすに至つた。その後滿洲國軍政顧問として、關東軍參謀副長として、また參謀長として滿洲建國運動の第一線に參畫してその育成につとめた効績は偉大なるものがあつた。

昭和十一年三月中將に進み、間もなく第五師團長となつたが、翌十二年支那事變勃發、大將は直に〇〇部隊長として北支に出動し、南口、八達嶺の嶮を越えて疾風の如く京綏の地を席卷し、進んで大原を攻略し、徐州戰では山東の荒野を南進、徐州陷落後、續いて敵を急追したが、十三年六月杉山陸相兼對滿事務局總裁の軍事參議官となるに及び、その後任として近衞第一次內閣に入閣、次いで平沼內閣に留任し、革新軍部の總帥としてその軍政家的手腕を從橫に發揮、事變遂行に資することころ多大なるものがあつた。

昭和十四年九月西尾大將の支那派遣軍總司令官就任と共に支那派遣軍總參謀長として南京に乘り込んだ。在任滿二ヶ年今回の大將親任と共に、中村孝太郎大將の後を承けて朝鮮軍司令官の榮轉となる。事變の處理未だつかず、而もその當初より一時たりとも事變關係より離れたことなく今日まで推移して來た大將にとつては蓋し感慨無量のものがあらう。

内閣總理大臣兼陸軍大臣兼軍需大臣

東條英機

從三位勳一等功二級

陸軍大將　東條英機

明治十七年十二月生

東條內閣の性格

昭和十六年十月十六日第三次近衛內閣が突如として總辭職を決行した。而してその理由は「國策遂行上の見地……」よりと發表された。即ち國策そのものは不動である。それはしば〳〵機會あるごとに政府の確言したところでもある。吾人もまたそれにいさゝかたりとも疑を持たない。次いで翌十七日陸相東條英機中將を以て後繼內閣の主班となすの大命が降下された。こゝに於て、國民はひとしく邦家が正にのつびきならない關頭に立ち至つたことを感得した。而も十八日のスピード組閣完了により、首相の陸相、內相の兼任を知るに至り、國民待望の政戰一致の戰時內閣がいよ〳〵ここに軌道にのつたことを思はせた。

今回の政變は前述の退陣內閣の聲明によつても知られるやう、國策遂行上の意見が一致しなかつたまでである。「支那事變完遂、東亞共榮圈の確立、日獨伊三國同盟を基調とする世界平和寄與」の根本國策に不一致を來したのではない。さればといつて邦家の正に運命の岐路に立ち至つた時、遂行上の意見不一致また斷じて許せるものではない。そこに東條新內閣の一切の性格が存在するのである。

聖戰こゝに四年有餘、その間既に六次の內閣を迎へてゐる。かの日清、日露のそれに比する時、正に破天荒と云はざるを得ない。それだけ事變の重大さをまた裏書するものではあるが、翻つて考へれば、それ等過去の歷代の內閣が國策遂行上、今日まで可なりな効果を擧げて來たのは事實だが、全般的に見るなら、尙いさゝか强化に缺けて居つたといふことは否めない。數次に亘る內閣の更迭を見たといふことも、その故に他ならない。こゝに

第七次東條内閣を迎へ、遂に名實共に戰時内閣の全容を調へた内閣の登場を見るに至つたといふべきである。

而も新首相はその組閣劈頭、ラジオを通じて斷乎たる所信を述べると共に國民の信頼と協力を求めた。この一言一句こそ、吾人の正に聞かんとして聞いた待望の聲であつた。

人物略歴

大將の人物は一口に云つて革新的人物と云へやう。而も明敏な實行家であることは、何よりも大將の特質である。今日の日本はまさしく興廢の前夜にある。一に實行、二に實行、三に實行、これを措いて策なしである。かゝる意味に於て大將こそ時の人たるの資格を備へた第一人者であらう。かつて大將が陸相に就任した時、全省員に多大な感銘を以て迎へられた名訓示がある。曰く「百の荷安は平時百年の懈怠に匹敵す。時勢に活眼を開き、軍の第一線と否とを問はず、何時も戰鬪を以て規準となし、電擊的に軍政を處理すべし。もし課長決せずんば局長速かに決し、局長決せずんば次官速かに決し、次官決せずんば吾れ直に決裁せん」と、實行家大將の面目躍如たるものがある。

大將はかの米内大將と同じ岩手縣の出身であると云はれるが、東京市で生れ、東京市で成人した、いはゞ江戸ッ子である。父は陸軍切つての軍略家と稱された故英教中將、その三男として明治十七年十二月を以て生れた。當年五十八歳、陸士は第十七期歩兵科の出身で、陸大は優等組、卒業後獨逸駐在武官を經て陸相副官、參謀本部員、歩兵第一聯隊長等に歴任し、昭和八年三月陸軍少將に進級、同十一月軍事調査部長となる。この頃より大將の軍政家としての革新的手腕が部内に知られるに至つた。當時陸軍には大將の一期先輩にかの永田鐵山少將あり、軍務局長として所謂陸軍革新陣營を結成し、國軍の大刷新が試みられやうとしてゐた。而してそのブレイン・トラストとしてのメンバーの筆頭にあつたのが、時の少將東條大將であつた。續く現企畫院總裁鈴木貞一中將、同部長秋永月三中將、それに軍務局長武藤章少將、實にこれ等後年の大物を集めて、正に華な脚光を浴んとした

時、不幸かの相澤事件によつて永田少將が殪れたのである。かくして革新派も四散、大將は久留米の旅團長として轉出、三年に亘る雌伏生活がはじまつた。この三年はいはゞ大將の修養時代でもあつた。十一年十二月中將に進み建設間もない滿洲の憲兵司令官として赴任す。次いで翌十二年三月關東軍參謀長となり、こゝに再び大將の存在が世人に再認識されるに至つた。間もなく今事變勃發、大將は直に機械化兵團を率ゐて北支に轉戰赫々たる武勳を樹て、翌十三年歸還、第一次近衞內閣の板垣陸相の下に次官となる。この時の手腕により、軍の內外から押されて遂に近衞第二次、次いで第三次內閣の陸相として在任一年四ケ月、百萬の大軍を支那に動かし而も刻々に變貌する國際情勢に對處して、かつてなかつた國軍の强化を實現した。しかしてこゝにまた一躍首相の印綬を帶ぶるに至つた。

大將はまた組閣と共に大將に親任された。現役のまゝ首相就任の五人目である。また軍部大臣兼任は過去に海相を兼任した加藤友三郎海軍大將を數へるのみ、而も大將はその上內相をも兼任す。かつて兒玉大將の陸相兼內相の先例あり、それ以來のことである。

昭和十六年十二月一日印刷
昭和十六年十二月五日發行

【大將傳陸軍編】
定價 參圓五拾錢

東京市世田谷區野澤町二ノ二〇三
編輯兼發行者 西川禎則
東京市麴町區飯田町二ノ二〇
印刷者 倉島清高

東京市京橋區京橋三丁目二番地
發行所 建軍精神普及會
電話京橋一四四六番

日杏社印刷所

不許複製

4500
71
자207